

XI 才2回アンケートの結果について

昨秋、会報才15号に同封して実施した才2回アンケートは、熱心な会員30名から回答をお寄せいただいた。しかし回収率は5%ときわめて低率であり、残念ながら多くの会員の考えを知ることができなかった。ここに集計結果を掲載し、今後の会務運営の参考に供したいと考える。

1. シンポジウム・座談会に出席されて、どのような感想をお持ちですか。

- | | |
|------------------------------|-----|
| (1) 大体现状でよい。 | 12名 |
| 〔例〕 海洋生物資源開発、才7回北洋 | |
| (2) 話題提供者が多く、十分討論する時間がない。 | 9名 |
| 〔例〕 サケ・マス食性、海洋生物資源開発、伊勢湾・三河湾 | |
| (3) 話題の取り上げ方は、大体これで良い。 | 1名 |
| (4) 〔その他の意見〕 | |

水産と海洋との結びつきをもっと主テーマにすべきである。それに資源を或る程度結びつけること。

例えば、「サケ・マスの食性に関するシンポジウム」のように、魚種を限定しないで、魚の食性をテーマにもっと大きくとりあげて「特集」を毎号やってはどうか。魚種が常に限定されているように思われる。また総括が常に十分であるとは言えないように思える。単なる現象・理論の羅列に終わらないよう総括を充分行なう必要があると思う。

水産海洋研究会の会員全員がプラスになるような運営方法で議題を選定して議事を進め、研究会の名前に反するような政治色は出来るだけ排して貰いたい。

Speaker がだんだん固定されてきて、どの会合にも同じような顔ぶれが揃い、新鮮さに欠けるようになってきたのではないか。力の安定した有名人よりも、才一線の悩み多い若者を起用してはどうか。

全体的に漁業動向と水産研究の結びつきに関するものの不足を感じる。(他の学会より良いが)

座談会も、シンポジウムも、話題提供を数少くして充分討論出来るようにする。科学の各方面からの検討を必要とする。

定例的に開かれているシンポジウムの中で、一部、話題提供者に準備の不足、新味の不足などが見られる。提供者に過重負担になっているおそれはないが、年々の進歩をもっとはつきりつかむ必要があるのではないか。

座談会・シンポジウムの回数が多いためか、講演内容が未整理、資料不足のものが多。

もう少し討論する時間が欲しい。

地方より出ていく者にとっては、又とない良い研修の意をもつ。各分野にわたって広く企画し、要点をしぼっているところが良い。

ディスカッサーとして発言が限定されたり、時間に余裕がなくて話し放し、聞き放しというのではつまらない。討論のできるような方式をとられたい。

話題提供者が多すぎる。話題は1日に3項目位で、海洋と生物、または、環境と生物をどう関連づけるかという点にしぼった方が良い。

2. 会報の基本的編集方針について、どのような御意見をお持ちですか。

- | | |
|-----------------------------------|-----|
| (1) 現状のシンポジウム・座談会記事中心でよい。 | 17名 |
| (2) 論文に重点を置くべきだ。 | 3名 |
| (3) 総述・評論・解説などの記事がほしい。 | 8名 |
| (4) 漁海況、漁場開発、漁業規制などの水産海洋ニュースがほしい。 | 7名 |
| (5) [その他の意見] | |

田舎であるので各種論文に接する機会が少ない。内外の論文の紹介をお願いしたい。

現状の他に(2)論文への重点、(3)総述・評論・解説などの記事、を適宜はさんで欲しい。

論文(正式の)とはいわれなくとも、新しい idea あるいは、興味ある学術ニュース等が欲しい。例えば、文部省の科学研究費の配分で水産海洋関係のもの等。

部分的問題よりも、もう少し大きい問題を中心にとりあげて欲しい。

シンポジウム・座談会の記事あり、論文あり、総述・評論・解説あり、ニュースあり、いろいろあってよいと思う。"形式ばらないもの"の良さを十二分に発揮して、新鮮であってほしい。

結局、どれとも限定はできない。とにかく、良い論文や情報等があれば、どしどし掲載して欲しい。

印刷にミスプリントが多いので、注意して欲しい。

“水産海洋”の範囲はどこまでか。何か網羅主義的で、すべてがダイジェスト版の感(すなわち、二番煎じ的な感じ)をうける。1つのテーマを何回も深く突込むことは出来ないだろうか。

(1)中心が良いが、それについての総述・評論・解説を詳しく記載するようにされたい。また特記すべき(4)があれば欲しい。

発表者の別刷位はもっといいのに、柱には誌名、No.、年等もっとレイアウトの基本的性格を守ってほしい。別刷があっても、いつの、何に発表のものかもわからない。

予算の都合で(3)(4)(1)の全部を多くすることが困難であれば、(1)(4)だけでも可。

ローカル・ニュースも載せてほしい。

シンポジウム・座談会記事中心として、指導的な論文・総述・評論・解説などの記事がほしい。

論文とも情報ともつかないような話題提供が多く、こんなものに印刷費をかけるのはつまらないようなものも多い。編集にあたっては、無理やり要約をのせなくてもよいものは、カットされたい。

論文は学会・研究所等の研究報告にすることで、話題要約と論議を中心に会報編集した方が良いと思う。

部厚い会報を年2回出すよりも、総頁数は同じでも、これを4回に分けた方が効果は大きいのではないか。沢山の情報を一度に与えられても、消化不良になりかねない。

論文なのか、単なる記録なのかはなはだ不明確、投稿にはやはりいますこしの基準を設けるべきである。また特に図はフリーハンドでないものを求めたい。

3. 会報オ15号で何に興味を持たれましたか。

(1) 水産資源・海洋研究への電子計算機の利用に関するシンポジウム	7名
(2) サケ・マスの食性に関するシンポジウム	6名
(3) 海洋生物資源開発における水産海洋の諸問題シンポジウム	6名
(4) 遠洋トロール漁業に関する水産海洋研究座談会	3名
(5) カタクチイワシに関するシンポジウム	3名
(6) オ7回北洋漁業に関する水産海洋研究座談会	2名

4. 現在の年会費800円を値上げすることについて、どのようにお考えですか。

(1) もし会報を活版印刷にするなら、1,500円位に値上げしてもよい。	4名
(2) 会報の増頁、印刷費高騰などの理由なら、200円値上げして、1,000円にしても止むを得ない。	20名
(3) たとえ会報を減頁しても800円を維持してもらいたい。	5名
(4) [その他の意見]	6名

1,500円にして年3回にするか、1,000円として内容を充実して年2回発行するか何れかでしよう。

残念ながら、現在の印刷、図表にみにくいものがあり、また数ページから数十ページにわたって抜けていたりすることもある。発展するものなら、年に1,000円くらいの値上げは決して高くないと思う。

水産の分野は余りにひろい。したがって、分布、回遊、餌料、漁場、経営といった分類でもよい、たとえば「サケ・マス」「カツオ・マグロ」——といったもの別に小冊子として分冊し、会員はほしい号のみを申込みによりうけとる。不要な部分が各人にとっては多すぎると思う。年度内に総目次を出す。事務局につねにバックナンバーの有無を明示する。

幹事の運営しやすいように、2,000円くらい値上げしてよい。

座談会、シンポジウム共に要約の印刷の仕方を配慮して、印刷頁を縮少すべきだと思う。

何んでもかんでも、水産と海洋に関係のあるものを印刷すれば高価になるのは当然なこと。系の分離をして、生物と環境についてのものだけにすることがよい。

5. シンポジウム・座談会にどのようなテーマを希望しますか。

水産と海洋開発、食品と海洋開発。(小生、産業界(水産を含む)の海洋開発関係の委員をしており、とくに水産の海洋開発について、PRし、講演などをしているので)

テーマの対象となるものが、常に、魚種もしくは、漁業種で、遠洋または大型漁業中心のものに限定されている傾向があるように思える。

ニシン、サンマ、マイワシなどの大衆魚が現在、不漁であるが、どのような原因でこうなっているのか、シンポジウムのテーマとして取上げ、検討していただきたい。

海洋開発、特に、世界の新漁場開発。ハマチ、エビ、タイ、ヒメマス、ニジマス養殖。

Topicsを食い散らさずに、本会としての基本的な2つのテーマ、生物と環境に関する問題に中心をしぼり、何回か同一テーマを深く掘り下げるような試みをしてはどうだろうか。または、総合的に、"これからの漁業発展の方向は何か"ということについて、各方面からSpeakerを出して徹底的に論議してはどうか。

研究テーマ毎に漁業のあり方とその結びつきについての論議が欲しい。

日本周辺の各内湾漁業と水産海洋の関連、特に、工場都市廃水問題。

仲々むずかしいかも知れないが、生物現象のメカニズムをさぐるようなテーマを希望。

全日本各地における気象、海況、漁況などと関連する水族生物などの打ち上げに関するテーマなど。日本各地には割合多いと思う、あまり問題とされていないが、驚くほど生物と物理的な要素と結びついている場合がある。(異常な例は多数あると思うが、ここでは例年みられるものとしてである。)

ひとつの欠点は、各研究者の話すことが、専門にはしりすぎ、そのシンポジウムのかかせる大題目に対する大展望、考え方、見方といった面にかける。大ざっぱでよいから生物と海況などをいかに有機的な関係であるかなどを示すべきである。それが水産海洋学の本質であろうと考える。

水産学と水産業の関係。魚類の回遊に関するシンポジウム。

底層の海洋と底魚の分布について。

魚種毎のシンポジウム、座談会が希望。海洋については海域毎のシンポジウムが希望。

ふ化後最初の餌料及びその生物。

その時、あるいはその地域で問題として大きく浮かび上がっているもの。

シンポジウムに行政官、漁業者をまじえてなされていることは、非常に研究者のあり方として普遍性をおびたものと思う。

水産海洋研究の基本論についての突っ込んだ討議ができるようなシンポジウムを企画してほしい。

漁況予報、気象と海況の関係、海況と魚の関係。

水産海洋研究の方法論。

6. その他、本研究会の運営などに対する御意見、御希望を聞かせて下さい。

安い会費で良くやってくれて感謝している。内容も漁業と結びついたことが多く、大変参考になっている。

学者先生ばかりでなく、業界からもっと積極的に入るように努力すべきである。また、実際の資料などは業界の方が持っている。これからは、横割り、System Engineeringの時代であるから、業界ももっと積極的に参加すべきである。そのために会場を業界でやるのも一法である。

「会の運営」についてはむづかしくてわからないが、地方での活動を活発にする必要があるのではないか。シンポジウム・座談会のテーマ等は——5に関連して——沿岸漁業者を含む広い層から毎年アンケートをとって参考資料としたらどうか。

会報は年2回から年3回に増し、座談会・シンポジウムの議事録等はなるべく早く知らせてほしい。

毎号そうであるが、配本されて目次を開くと、一応、面白いと思う。幹部の方の必死の努力にもかかわらず、一部の人の自己満足、極端に言えば、マスターベーションに終わっている怖れがある。会員の大部分は会報を通じてのみ、本会と関係をもっていることを注意しなければならないと思う。

会報中に、2頁ほど印刷されていないのが、15号の中にあっただけで、今後、充分気をつけてほしい。

各事業委員は、それぞれ、何のシンポジウム・座談会の委員であるのが、すぐわかるよう録事のところの書き方に工夫をねがう。

東京在住、在勤の幹事だけでどんどん進めていただき、2年に1回位、アンケート調査をしていただくか、地方でのシンポジウム等に東京の幹事が出席なさった時、地方の幹事と意見を交換されればよいと思う。

とりあげる方面が、少し、多方面にわたりすぎて、蛇冗に流れる恐れがみられる。水産と海洋のきり離し得ない現実を直視した水産研究の基本にふれた面を、今後とも、積極的にとりあげてほしい。

地方でシンポジウムをするのは、この会の特色であるから、どしどしするようにしてもらいたい。生物と海洋をどのように結びつけて行ったらよいか、という点についての討論の場として運営すべきだろう。

◎各地の漁海況など水産海洋ニュースをお知らせ下さい。

「釧路」サンマ・イカ・不漁とはいえ、魚価の高騰(今年の2~3倍)により、漁業経済は充分、成立している。経済からみた必要とする魚の資源量を考慮すると、過去の漁獲量水準は比較にならないのではないか。(釧路水試)

現在、鋭意潮岬沖合の天然魚礁と一本釣の関係を調査研究中、年末までに調査完了し、概要をまとめたく思っています。(和歌山水試 阪本俊雄)